

## 第1回北東アジア地域協力発展国際 フォーラムと中口国境出張記

ERINA調査研究部研究主任 三村光弘

2008年6月13日～22日、国際会議への参加と、中口間の経済交流の現場を視察するため、中国・黒龍江省（ハルビン、黒河、撫遠、同江）とロシア・アムール州（ブラゴベシエンスク）、ハバロフスク地方（ハバロフスク）を訪問した。

### 第1回北東アジア地域協力発展国際論壇

第1回北東アジア地域協力発展国際フォーラムは、6月14日～15日、ハルビン市のシャングリラ・ホテルおよび友誼宮で行われた。この会議の主催は黒龍江省人民政府および中国社会科学院で、実際の組織・運営は黒龍江社会科学院が行った。この会議には、主催国である中国だけでなく、日本、イスラエル、モンゴル、韓国、ロシアから代表が参加した。

中国では、この種の地域経済の発展に関するフォーラムが活発である。その一例に2004年から毎年開催されている「汎珠江デルタ地域フォーラム」がある。このフォーラムは、広東、福建、江西、湖南、広西、海南、四川、貴州、雲南の8つの省政府と香港、マカオ各特別行政区政府が地域経済の協力、一体化発展を目指して協議するフォーラムである。今回のフォーラムも、今後北東アジアにおける地域経済交流のためのハブとなることを目指して始められたと思われる。

会議の具体的な内容は、黒龍江省社会科学院のホームページ（[http://www.hlss.com/public/AA/index.jsp?TemplateName=AA\\_hy\\_dby\\_dbfy\\_1.htm](http://www.hlss.com/public/AA/index.jsp?TemplateName=AA_hy_dby_dbfy_1.htm)）で詳しく紹介されているので概略の紹介にとどめるが、北東アジアにおける経済交流において黒龍江省がどのような方向性を示していけばよいか、という問題に関心が集められているようであった。今回の議論の特徴といえば、まず隣接するロシアとの経済交流に関する議論が大変活発であったこと、黒龍江省の主要産業である農業についての議論も数多く見られたこと、観光についての議論も多かったことなどがあげられる。

日本からは在瀋陽総領事館の松本盛雄総領事が開会に際しての挨拶を行ったほか、日本貿易振興機構（JETRO）大連事務所の藤原弘所長や日中東北開発協会、哈爾濱華通豊田汽車有限公司、北海道大学、福岡県上海事務所、（財）九州経済調査会、山梨県立大学などからの参加者があつた。ERINAからも3名が参加した。

今回は第1回ということもあり、参加者の組織自体が大変であったと思われる。それでも、ロシア、日本、韓国の専門家の数は多く、分科会でも活発な発表がなされた。これまでロシアとの経済交流に主軸を置き、北東アジアという枠組での交流・協力についてはそれほど活発ではなかった印象があつた黒龍江省であるが、今回のフォーラムの開催を通じて、北東アジア地域との連携にける黒龍江省の意気込みが伝わってきたように思う。

#### ロシア人でいっぱい隣の町、黒河

6月16日、ハルビンをあとにして空路、黒河に向かった。ハルビンから黒河までは直線距離で500キロあまり、飛行機だと1時間で着く。黒河市の人口は173万人だが、これは行政区画としての黒河市の人口であり、市内の人口は20万人ほどである。対岸にはロシア・アムール州の州都、ブラゴヴェシチンスクがある。

到着後、昼食を取りに市内の中国料理レストランに行くと、写真1のように、ロシア人客を多く見かけた。大体お客の半分くらいがロシア人であった。ちなみにこの店は、ロシア人に人気の高い中国料理レストランであるという。そのせいか、写真2のようにロシア語メニューも用意されていた。私が注文するときには、中国人客と思われたせいか、メニューは手渡されず、多くの中国料理レストランで見られる、実物模型を置いた注文コーナーで選べと言われた。

この中国料理レストランに限らず、市内中心部にあるケンタッキー・フライドチキンの店にも写真3のように、ロ



写真1 黒河のレストランのロシア人客



写真2 ロシア語のメニュー



写真3 KFCの注文もロシア語で



写真4 商店の看板にもロシア語が...

シア語で注文できるカウンターがあった。写真4のように、黒河市内にはロシア語の看板があちこちにある。

翌6月17日朝、黒龍江の中州である大黒河島にある国際商貿城（国際マーケット）に出かけた。この国際マーケットは、対岸のロシア・ブラゴベシェンスク市からの買い物客を主な顧客とした市場である。場内は多くの区画に分かれ、各区画に個人事業主が入居して販売を行っている。販売品目は、食品、雑貨、服飾、電気製品、自動車用品など多種多様な物が売られている。建物の広さは9,800平方メートルほどで、延べ床面積は23,000平方メートルほどだろうか。お客のほとんどはロシア人で、中国人は商売の関係者ばかりであった。

#### 黒河からブラゴベシェンスクへ

同日午後、国際商貿城の東約300メートルの所にある黒河口岸（出入国施設）からロシア・ブラゴベシェンスクへと出発した。結氷期以外は船で黒龍江を渡る。

ロシアから来る客が圧倒的なせいか、黒河口岸の前にはロシア行きの切符を売っている場所がなかった。仕方がないので、とりえず出国審査を受けるために建物の中に入った。中国からロシアに行く場合も、通常の出国手続と

同じで、まず税関検査（荷物のX線検査）を受け、次に出国審査を受ける。黒河から出国する日本人は珍しいからか、出国の際にパスポートの増補部分が真正な物かどうかを調査すると言われ、出国審査に30分弱を要した。辺境の陸路国境でも香港、マカオの境界やベトナム国境の東興や友誼関、ロシア国境の琿春、朝鮮国境の丹東や圈河（琿春）ではこのようなことがなく、スムーズに事が進んだだけに、黒龍江省が緊張度の高い辺境地帯であった名残を感じた。

出国審査を終えたあと、船着き場に向かった。途中で警備の警官に「切符を持っているか」と声をかけられたので、「ない」と応えると、「ちょっと待っている」と言ってどこかに行ってしまった。数分後、ロシア行きの切符を持って現れた警官は「100元」と言った。切符はしわくちゃだったので、正規の売り場で買って来たとは思えなかったが、それ以外の方法もなさそうだったし、値段も妥当だったので、礼を言ってお金を払った。

黒河を出発した船は、10分ほどで対岸のブラゴベシェンスクの船着き場に到着した。中国側は高い堤防がないのだが、ロシア側はかなり高い堤防があるので、埠頭から出入国施設まで40段ほど登らなくてはならなかった。ロシア側の入国審査でもここを通る日本人は珍しいらしく、パス



写真5 大黒河島国際商貿城の外観



写真7 乗り合いタクシーの停留所



写真6 大黒河島国際商貿城の内部



写真8 ブラゴベシェンスクから見た黒河

ボートが本物かどうかを鑑定するために30分ほど待たされた。結局入国審査には45分ほどかかり、その後外国人登録と税関検査（どちらもすぐに終わった）を済ませて建物を出た。

ブラゴベシンスクの港にはバス（厳密には乗り合いタクシー）が通っており、市内まで12ルーブル（約60円）ほどで行くことができる。写真7の停留所からバスに乗り、最寄りのホテルの近くで下ろしてもらった。

ブラゴベシンスクから建立150周年のハバロフスクへ

翌18日、ブラゴベシンスクからハバロフスクへと向かった。ブラゴベシンスクからハバロフスクまでは直線距離で約600キロ。飛行機で2時間ほどの旅である。ロシアの国内線は自由席のフライトもかなりあるようで、今回のフライトもそうだった。飛行機はアントノフ24型ターボプロップ機で写真9のような湿地帯の多い大地の上を飛んでいく。ハバロフスク空港に到着後は、トロリーバスで市内に向かった。

ハバロフスクは、1858年にアムール川を東進してきたロシア帝国の監視所が建設されてから150年目の今年、建立150周年を祝う横断幕が街のあちこちに掲げられていた。

ハバロフスクから撫遠へ

6月20日、ハバロフスクの河港から高速船で中国・黒龍江省の撫遠へと向かった。このルートはロシアの観光客を主な乗客とするルートで、撫遠への日帰りツアーが3,250ルーブル（約15,000円）。かなり高いが、ハバロフスク発の最もお手軽な外国旅行である。片道運賃は特に設定されていないようだったが、旅行社と交渉の上、1,800ルーブル（約8,500円）にしてもらった。

朝、9時50分に港の前の旅行会社事務所前に集合し、すぐに船会社でチェックイン。その後、出入国手続を終えて船が出発したのは10時53分だった。撫遠にはロシア時間の12時10分、中国時間の9時10分に到着した。

私が乗った船の乗客約60名のうち、中国人が2名、日本人が1人、それ以外は全員ロシア人だった。船を下りて、写真11の撫遠口岸に向かう。人数が少なかったので入国審査は「楽勝！」と思いきや、中国の旅行会社のスタッフが入国審査を受けようとしていた私に「こっちに来い」と言う。付いていくと、中国の入国管理官が私にパスポートを出せと言う。パスポートを渡すと「ちょっと待っている」と言ってどこかに行ってしまった。

他の客たちは早々に入国審査を終え、審査場を出ていくが、私のパスポートは帰ってこない。他の入国審査官たち



写真9 蛇行する川の上を飛ぶ



写真10 ハバロフスクは建立150周年



写真11 観光客でにぎわう撫遠口岸



写真12 果てしなく広がる三江平原



写真13 撫遠～同江の道路

が「早く審査を受ける」と促すが、パスポートがないので、審査を受けることができない。10分ほど経っただろうか、件の審査官が戻ってきて、審査事務所に通され、席を勧められる。撫遠からどこに行くのか（哈爾濱まで行って日本に帰る）お前は元中国人ではないのか（いや、生まれてからずっと日本人だ）なぜハバロフスクから直接日本に帰らないのか（ここに来る前にハルビンで会議があって往復切符を買ったから、使わないもったいない）など、いろいろな質問をされた。

話を聞いてみると、今年撫遠口岸に入った日本人は私が初めてで、昨年は数人来たが、すべて即日ハバロフスクに戻ったとのこと。撫遠から入国して、どこかに行ってしまう日本人ははじめてということになる。旅行社のスタッフが言っていた「オリンピック前なので…」という言葉が脳裏をかすめた。書類上の不備はないのだが、こんな辺境で入国しようとする自体が不審だと言うことなのだろう。

結局、40分あまりおしゃべりした後、特に入国拒否をする理由もないということになり、入国審査を受け（審査自体は1分もかからなかった）税関審査を済ませ、建物を出た。入国審査と税関の係官が揃って見送ってくれた。

撫遠ではロシア人の観光客がどんな物を見て、どんな物を食べ、どんな物を買っているのかをツアーに同行して見てみたかったのだが、入国に1時間近くかかったせいで団からはぐれてしまった。入国管理の人々にも心配をかけたことだし、さっさとこの街からおさらばしようということで、バスターミナルに行き、同江行きのバスに乗った。



写真14 同江からロシアへ向かう交通

撫遠から同江へ

撫遠から同江までは約200キロ、バスで2時間半の旅である。高速道路はなく、一般道路なのだが、写真12のように果てしなく広がる三江平原を貫く道路（写真13）なので、渋滞はなく、乗客の乗り降り以外はひたすら走り続けるため、平均時速はかなり高い。

同江に到着後、バスターミナルを見に行ってみると「国際バスターミナル」と書いてある。写真14のように、同江の近くに渡河点があり、結氷期は同江のバスターミナルからピロピジャンやレーニンスコエ、ハバロフスクへバスが走っているようだ。結氷期以外は、哈魚島という河辺の村から船で対岸に渡り、ロシアの国内バスに接続することになっているようだ。

今年の4月には中国の国家計画発展委員会が、同江と対岸のレーニンスコエを結ぶ鉄道橋の建設許可を出した。同江は同江と海南島の南端、三亜を結ぶ国道010号線（延長5,700キロ）の起点でもある。今後、この地域が中国とロシア極東を結ぶ交通の要衝になることは間違いなさだろう。それを見越してか、同江市内はあちこちで建物（オフィスビルとマンション）の建設が行われていた。